

経営者への活きた言葉

地道に商いに励んだ結果が利益である伊藤忠兵衛(伊藤忠商事創業者)

1. 代表的な近江商人の一人で、伊藤忠商事や丸紅の礎を築いた初代伊藤忠兵衛は、「利真於勤(利は勤むるに於いて真なり)」という言葉を書右の銘にしていた。この言葉が示すのは、真の利益とは、地道に商いに励んだ結果として得られたものだけだ、ということである。
2. この言葉に基づいて、投機的な売り買いや、買い占めや売り惜しみなどによる相場の操作、相手の弱みに付け込む強気の商いなどは禁じていた。小手先のテクニックや他人に無理を強いることで儲けても、結局は信頼を損ねて家業長久の妨げになるからだ。こうしたやり方で利益を上げたとしても、正当な利益としては認めないという厳格なルールを、忠兵衛は自分と従業員とに課したのである。
3. 利益の正当性にこだわる考え方は、近江商人全般に共通していた。利益を見るときに、彼らは「結果」である数字を評価するだけではなかった。どのようにして儲けたかという「プロセス」を極めて重視していた。こうすることによって、目先の誘惑に打ち勝ち、ビジネスの本道を踏み外さないことを常に心掛けていた。

(参考:「日経トップリーダー」 2011年 2月号)

幹部への活きた言葉

手取り足取り教える佐々木常夫(東レ経営研究所特別顧問)

1. 部下の中には、放っておいても仕事をこなす人もいる。そんな部下はそのままでもいい。だが普通の人にはそうはいかない。「こうやってごらん」とアドバイスするなど、手取り足取り教えてあげることも時には必要になってくる。丁寧に世話をしてあげるのも、課長の役目なのだ。
2. 課長とは、部下が幸せをつかめるように道を照らしてあげる役目ではないかと考える。仕事を成就させる過程では多くの困難や問題、つらいこともある。だがそれが完成したときの喜び、あるいは達成感や幸福感には、何ものにも代えがたいものがあるのではないだろうか。

(参考:「週刊東洋経済」 2011年 1月 15日号)